『國民新報』1939年8月27日

[主張]　交通の禮儀　　－たつた一歩だけ譲り合ふことだ―

　、をはず、ゆるはなのがのであるが、これはのがんになつたで、にすべきことである。かゝるはまでもいてしいことで、のがめばむ々はえる一であらう。

ところがでになるのがちにけるのである。のななでははりである。しいへしうのはまだしもとしてしけ、きし、みひりふ、をさへ々せけられるにいては、なるをしてのがなくならざるをない。もそれがなよりはの々によつてぜられてゐるのである。の々にはがあるが、のにはとがあるためのである。これではのたるのはれである。

　とかとかふものはをみよくせんがために、やのきによつてさせられたものであるが、そのはの『き』からしてゐるのであつて、にまれたものはさへすれば、らそのがにふくてゐるものである。がおにのにしほんの一りふことによつてのはによくなされるし、これにして、ほんの一しやばることによつてはおにえいのをするのである。に、『おに』の一こそは、とのなのだ。これに『ありがたう』と『みませぬ』の二ツをへれば、なる、なるにいてものはるのである。

　おにこのちにきることはにとかのためばかりではない。にのをなすもので、このをき、このにずれば、ちはなの一となり、の一にもなるのであつて、のこゝにありとふべきである。

　やのこそはにのくはしくかれたのであつて、にをへるなるものである。かゝるをへないはありないことだ。